

北京五輪柔道競技観戦記

増地克之

A report on Judo in The Beijing Olympic Games

Masuchi Katsuyuki

1 はじめに

第29回オリンピック競技大会は、2008年8月8日から24日までの17日間、中国・北京で行われた。柔道競技は開会式翌日の8月9日から16日までの7日間、北京科技大学体育館（写真1）において開催され、92の国と地域から、男子は230名、女子は156名が参加した。試合は男女7階級で争われ、毎日男女1階級ずつ軽い方から行われた。好成績を期待される日本選手団は、前回のアテネ大会の金メダル8個を上回る、全階級制覇を目標に掲げて乗り込んだ。しかし、2007年ブラジル・リオデジャネイロ世界選手権では、男女16階級中金メダル3個しか獲得できず、しかもその内2個は、オリンピックに設けられていない階級である無差別級での金メダル獲得であり、戦前から非常に厳しい戦いが予想された。

筆者はこれまで、数多くの国際試合を観客席から見てきたが、オリンピックを会場で直に見るのは初めてであった。今回、筑波大学出身者が過去

最高の5名出場することで、応援を兼ねて一観客として日本人選手の戦い方、さらには世界柔道の流れについて視察してきたことをレポートしたい。

2 出発

8月8日、午後3時発の中国国際航空で北京に向け飛び立つ予定が、離陸直前に同航空会社の別便にテロ組織からの爆破予告が入ったため、更なるセキュリティーチェックの必要性が生じ、降機することになった。結局、当初の予定よりも3時間遅れの午後6時に北京空港へ向け飛び立った。しかし、無事に飛び立ったのも束の間、中国当局が開会式の開催中は安全面を優先させ、北京空港での航空機の離発着を制限することになった。約4時間のフライトで到着する予定が、予定を変更し天津に向かうことになり、旅の始まりからつまづくことになった。天津国際空港に午後9時（現地時刻）に到着し、そこから約120km離れた北京に向けバスで移動した。ホテルに到着したのは、自宅を出てから約12時間後の午後11時だった。

3 会場

試合会場である北京科技大学（写真2）までは、ホテル近くのバスターミナルから無料のシャトルバスで約20分程度であった。筑波大学とまではいかないが、北京科技大学のキャンパスは広大で、正門から体育館まで約10分程度歩かなければならない。そして体育館の入口では厳しいセキュリティーチェックを受けて試合会場に入った。試合場は2試合場設置されており、場外が緑色で場内はクリーム色に近い黄色であった。（写



写真1 北京科技大学体育館



写真2 北京科技大学

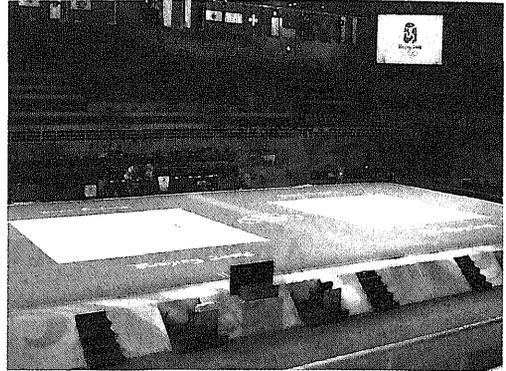


写真3 試合場

真3) さらに会場の左右には大型の電光掲示板が据えられ、見逃した瞬間があっても直ぐVTRで映し出され、観客のためには非常に良かった。試合は、予選ラウンドが午後12時から午後4時30分頃まで、決勝ラウンドが午後6時から午後8時頃まで行われた。休憩時間約1時間の間に、一度会場から出て再度セキュリティーチェックを行わなければならない。しかし、セキュリティー場が混雑するのは明らかであり、決勝ラウンドが開始される午後6時までに試合会場に入場できない事態が生じた。ただ、2日目以降は大会運営側も不備に気付き、予選ラウンドと決勝ラウンド両方のチケットを持参している者に限り、構内に残ることが許された。入場料は午前が50円(約800円)、午後は80円(約1,300円)であり、7日間全てを観戦すると約15,000円となり妥当な値段設定であった。

余談になるが、北京オリンピック開催前、日本国内では中国の大気汚染が懸念されており、念のためにマスクなどを持参したが、実際には全く問題なかった。これは、北京当局が大気汚染対策に1200億元(約1兆9000億円)を投じ、工場操業や交通の規制等を行ってきた成果が現れたものであるといわれている。

4 試合

大会1日目。本大会出場者の中で男女共に金メダルが一番近いと前評判の高い平岡拓晃(60kg級・本学OB)、谷亮子(48kg級)が出場。特に初日に出場する二人の選手の出来如何で、二日目以降の選手達にも少なからず影響するため、日本チームにとっても今後を左右する一戦となった。

しかし、平岡は膝の怪我の影響なのか緊張からくるものなのか、自分本来の動きが見られず格下の選手に無念の初戦敗退。また、谷は3連覇が確実視されていたが、準決勝で欧州選手権4連覇中のドミトル(ルーマニア)に終了間際の不可解な「指導」で夢を断たれた。昨年、谷は「後の先」の柔道を軸に世界選手権で優勝したが、外国人選手も研究しており思い通りの試合運びができなかったのではないかと感じた。

大会2日目。重苦しい雰囲気の中、柔道選手最年長の内柴正人(66kg級)と女子最年少の中村美里(52kg級)が出場。内柴は年齢を感じさせない攻撃柔道で、今大会初の日本人金メダルを獲得した。また、中村は世界大会初出場とは思えぬ試合運びで見事銅メダルを獲得した。弱冠19歳でのメダル獲得となり、4年後のロンドン五輪も非常に期待される。

大会3日目。昨年の世界選手権3位の金丸雄介(73kg級・本学OB)。同じく佐藤愛子(57kg級・本学OB)が出場。金丸は初戦、長身の右の相四つで、強引に背中をつかんでくるマロマ選手(イラン)と対戦。開始早々双手刈で「効果」を奪うが、左肩を畳で打つというアクシデントに見舞われる。そして、袖釣込腰を掛けようとしたところ相手の払腰で返され初戦敗退し、敗者復活戦に回った。肩には痛々しいテーピングが見られ敗者復活戦1・2回戦は意地で勝ち上がったものの、肩の負傷が最後まで影響し最終戦では力尽きた。

一方、佐藤は初戦ガシモア(アゼルバイジャン)に開始早々、背負投で「技あり」を奪われたが、後半落ち着きを取り戻し、抑え込んで初戦突破。準々決勝は許(中国)との対戦となり一進一

退の攻防であったが、終了間際に佐藤の背負投が掛け逃げとみなされ「指導」を取られ、敗者復活戦に回った。敗者復活戦2回戦は順当に勝ち上がったが、最終戦ではクアドロス（ブラジル）の払腰で右膝を負傷し、そのまま一本負けとなった。金丸、佐藤ともに万全で試合に臨んだが、試合中の怪我という不運に泣かされた大会となった。

大会4日目。男子は小野卓志（81kg級・本学OB）、女子はアテネに続きオリンピック2連覇を目指す谷本歩実（63kg級・本学OB）が会場。男子81kg級は世界の強豪が数多い階級で、戦前から厳しい戦いが予想された。小野は初戦、昨年の世界選手権王者のカミロ（ブラジル）との対戦となった。世界チャンピオンだが非常に日本人に近い柔道するため、小野にも十分に勝機はあったが、何もできないまま序盤に肩車で「技あり」を取られ、その後も「有効」を二つとられるなど終始相手のペースで試合が終了し、残念ながら初戦敗退となった。

一方、谷本は決勝まで順当に勝ち上がり、決勝はこれまで数多くの名勝負を繰り広げてきたデコス（フランス）との予想通りの対戦となった。開始1分過ぎ、デコスの大内刈を内股に変化し見事一本勝ちを収め、アテネに続きオリンピック2連覇を達成した。谷本はここに来るまでの道のりは平坦ではなかった。北京オリンピックの最終選考会では負け、本来であればこの舞台には立っていなかったかもしれない。しかし日本柔道の原点であり、谷本自身の信念でもある「一本」を取る柔道を最後まで貫いたことが、オリンピック代表、さらには金メダルにつながったのではないかと感じた。（写真4）



写真4 金メダルを獲得した谷本選手（中央）、解説者として参加された山口准教授（左）

大会5日目。男子はアテネの銀メダリスト泉浩（90kg級）、女子は内柴、谷本に続き連覇がかかる上野雅恵（70kg級）が会場。本来の動きが見られない泉は、2回戦カズシオナク（ペラルーシ）に朽木倒で「一本」を取られ敗退した。当初から泉は減量が不安視されており、あつてはいけないことだが明らかに減量失敗であった。日本代表として自覚が足りなかったという以外何もない。

一方、上野はディフェンディングチャンピオンらしい落ち着いた試合運びで順当に決勝まで勝ち上がり、決勝でもエルナンデス（キューバ）に開始早々朽木倒で一本勝ちを収め、アテネに続きオリンピック2連覇を達成した。ここまで金メダルを獲得した日本人選手に共通して言えることは、常に攻める姿勢が見られ、相手の様子を窺いながら試合をするということが一切見られなかったことである。言い換えれば、最初から最後まで攻め切れる体力、さらには精神力は日頃の稽古で培われた結果と云えるであろう。

大会6日目。男子は日本選手団主将の鈴木桂治（100kg級）、女子は膝の故障で出場が危まれていた前年の世界選手権2位の中澤さえ（78kg級）が会場。鈴木は初戦ツブシンバヤル（モンゴル）に双手刈で一本負けを喫し、敗者復活戦でも朽木倒しで敗れてメダルに届かず、会場全体に衝撃を与えた。主将という大役を任せられかなりの重圧があったとは思いますが、明らかに3、4年前までの鈴木とは別人であった。

中澤は彼女本来の前に出る柔道は見られたものの、膝の怪我の影響からか技に精彩がなく、「指導」2を与えられ挽回できずに初戦敗退した。世界チャンピオンのラボルデ（キューバ）が米国に亡命し北京オリンピック不参加で、またとない金メダルを取るチャンスであっただけに、万全な状態でオリンピックに臨めなかったことが悔やまれる。

大会7日目。男子は石井慧（100kg超級）、女子は塚田真希（78kg超級）が会場。石井は自らの特徴である豊富な練習量から生み出された強靱なスタミナを武器に、準決勝まで全て一本勝ちで決勝に進出した。決勝戦は一本勝ちを収められなかったものの、勝ちにこだわる試合運びで、タングリエフ（ウズベキスタン）に「指導」2を与え見事優勝を飾った。

一方、オリンピック2連覇を狙う塚田は、初戦こそ硬さがみられたものの順当に決勝まで勝ち上

がり、決勝は予想通り佟文(中国)との対戦となった。塚田は序盤に大内刈で「有効」を奪うが、次第に相手のペースになり塚田に「指導」が与えられる。そして試合終了間際に、塚田が前に出て柔道衣を握ろうとしたところを背負投で合わされ、まさかの逆転負けとなった。しかし、最後まで攻める気持ちを持ち続けた塚田に拍手を送りたい。

5 世界の柔道

今回メダルを獲得した国は男子が19カ国、女子が15カ国、男女合わせて26カ国にのぼり柔道が世界に広がっていることを再認識させられた。特に、中央アジアやアフリカの活躍には目を見張るものがあった。逆に柔道人口が世界一のフランスは、金メダル0個という散々な結果となったが、もはや日本にとって対岸の火事ではないことは明らかである。

また、日本にもどった筆者には、決まって「あれは柔道ではない」という言葉がよせられた。実際にアテネオリンピックと比べると「一本」が減少し、足取りや捨身技が増加している。また男子で最も多く「一本勝ち」となった技は肩車であったことや、鈴木選手が双手刈で敗れたシーンなどを見ると、筆者自身もレスリング会場に来ているのではないかと錯覚さえ覚えた。

北京五輪が終わり、柔道界も新たなスタートを切った。10月にタイ・バンコクで開催された国際

柔道連盟の臨時総会で、大幅なルール改正が行われた。特に、「一本勝ち」を増やすために、最小ポイントである「効果」を廃止し、攻撃防御において、直接相手の下穿(したばき)を握った場合は「指導」を与えることなどが新しく盛り込まれた。このルール改正によって、日本柔道さらには世界の柔道が良い方向に向うことを期待したい。

6 おわりに

7日間に亘り開催されたオリンピック柔道競技での日本チームの成績は、4年前のアテネに比べ金メダル数は8個から半減の4個となり、非常に厳しい結果となった。特に男子は7階級中2個のメダルしか獲得できず、残りの5階級はまったくメダルに絡む事ができなかった。原因を一つ挙げるとしたら、4年に一度のオリンピックに最高のコンディショニングで臨めることが必要条件であると感じた。減量失敗はもつてのほかであるが、怪我や練習不足など、試合前に不安要素があるようだと、最高の舞台で最高のパフォーマンスを発揮することは到底できない。日頃から柔道に対して真摯な態度で取り組み、体調管理をしっかり行い、常に生活の中心が柔道でなければ、4年後のロンドンオリンピックは今回以上に厳しいものになるだろう。選手だけでなく柔道界全体がこの現状を受け止めて、今後の強化をしっかり考えなければならない。